

看護・看護教育分科会（一般演題（ポスターセッション））2016年10月20日(木)

緩和ケア4 【座長】南砺市民病院 野原 良子（10:00～11:00）

## 【看-065】一般病棟におけるデスカンファレンスの取り組み ～終末期ケアの質の向上を目指して～

いとう ももこ

伊藤 桃子、青沼 友紀

大崎市民病院 岩出山分院 看護部

【目的】終末期を病院で過ごす患者が増加傾向にある。A病棟では終末期ケアの振り返りの場がないのが現状である。そこで、デスカンファレンス（以下DCとする）を導入し、A病棟で亡くなった癌患者のケアを振り返ることで、今後の終末期ケアの質の向上につなげる。【研究方法】研究期間：平成28年3月～5月。研究対象：DCに参加したA病棟看護師の20名。研究方法分析：1)5回までのDCの記録を類似性に基づいてカテゴリー化した。2)質問紙調査による看護師の意識調査を単純集計した。倫理的配慮：対象者に研究の目的と意義を書面に説明。質問紙は個人が特定されないよう匿名化することで承諾を得た。【結果考察】DCの記録の分析結果から、第1のカテゴリー〈終末期ケアの振り返り〉第2のカテゴリー〈看護師の思いの振り返り〉第3のカテゴリー〈看護の提案〉の3つに分類した。サブカテゴリーとして「患者の苦痛評価」「家族ケア」「家族への思い」「医療者側の連携」「心残り」「葛藤」「家族との連携」の7つに分類し、コードは26に分類した。最も多く語られたのは、第1カテゴリーの〈終末期ケアの振り返り〉であり、患者の苦痛評価の難しさや家族の心の準備のサポートの重要性であった。質問紙調査の結果、DCが学びの場となっているかの質問に「はい」が100%、DCを継続する必要があるかの質問に対して「はい」が90%、精神的負担はありましたかの質問に対して「いいえ」85%、「はい」15%だった。この結果から、DCを行うことで看護師の感情表出の場となり、終末期ケアの振り返りができ、看護師のグリーフケアにつながったと考えられる。しかし、DCに対し精神的負担を感じているスタッフもおり、話しやすい場の雰囲気作りや集中できる環境の改善が必要である。また、今回DCに参加した看護師全員が学びの場となっているとの認識はあるが、自由回答では、入院時からのカンファレンスの必要性が課題とされている。このことから、今後もDCを継続するためには、入院時からのカンファレンスとDCの継続を行くことで、終末期ケアの質の向上につながると考えられる。【結論】1、A病棟におけるDCは、終末期ケアの振り返りの場となり、終末期ケアの質の向上につながる。2、今後、DCの環境調整、入院時からのカンファレンスが必要である。

一覧へもどる